

静岡県教育長賞

繋がる親切

磐田市立青城小学校 六年

大橋 弘誠



その日は、朝からどんよりとしたくもり空だった。

「こうせい、かさ持っていきなさいよ。」

お母さんに言われ、めんどくさいなあと思いつつながら、

「わかってるよ。」

と言って、ぼくはかさを持って、いつものように登校した。みんな登校し始めて、五分ぐらいたったころぼつぽつと雨がふってきた。登校班の中に一人かさを持っていない低学年の女の子がいた。ぼくはその子にかさを貸してあげた。そして、雨

にぬれながら、学校へ向かった。横断歩道に行くと、いつも旗ふりしてくれる鈴木さんが立ってくれていた。雨の中大変だなと思いつつながら、大きな声で、

「おはようございます」

とあいさつをした。鈴木さんのおかげで、ぼくたちは安心してわたれている。鈴木さんに、

「かさはどうしたの？」

と聞かれたので、

「貸してあげてます」

と返したら、

「えらいね」

と言われた。ぼくは、少しほろらしい気持ちになって学校へ向かった。

学校に着くころには、ぼくの服はずぶぬれだった。門を入ろうとすると、お父さんが袋を持って待っていてくれた。

「どうしたの？」
と聞くと、

「鈴木さんから連らぐがあつたんだ。弘誠がかぜひくからって。」

袋の中を見ると着替えとカイロが一つ入っていた。

「弘誠、朝お腹が痛いつて言っていたから、お母さんが入れてくれたよ。」

ぼくは、教室へ行くと、すぐに着替えて、カイロでお腹をあたためた。なんだか心までポカポカしてきた。

ぼくがした親切が、鈴木さんがくれた親切となって、ぼくの所に返ってきた。そして、ぼくは、とてもあたたかい気持ちになる事を知った。ぼく達は、みんな、だれかの親切の中で生きているのだと思う。ありがとうの気持ちをわすれずに、だれに对しても親切に接する事ができる人間でありたいと思う。

空はやっぱり、どんよりとしていたけれど、ぼくの心は、晴ればれとしていた。早く梅雨が明けてほしいなと思った。



静岡県教育長賞

勇敢な翼

静岡市立城内中学校 三年

海川 琴美



親切にしてもらったら「ありがとう」お礼を言われたら「どういたしまして」。これは当たり前であり、誰でも一度は言ったことがある言葉だ。私は人に親切にするのは「ありがとう」というのと同じ位当たり前のものだと思っている。なぜなら人は助け合いながら優しさを持って生きているからだ。でも私は一度だけ思いやりを持たず、現実から目を背けてしまった事がある。今でも後悔している。

その日、踏切を渡ろうとしたら、私の前に杖をついたおばあ

さんが歩いているのが見えた。「大丈夫かな。」と思いながらも、声をかけるには気恥ずかしさもあり、私はおばあさんを追い越した。が、おばあさんの足音が聞こえてこない。不安になって振り向いてみると、ちょうど踏切の真ん中あたりで止まっていた。幸い、電車が来る気配は無かったが、おばあさんはなかなか動けない様だった。私は勇気が無かった。「大丈夫ですか?」と一言声をかけ、手を差し伸べるだけの勇気がなかったのだ。「このままじゃ危ない、声をかけなくちゃ。」と自分を

叱ってみるも、やっぱり勇気が出ず、それどころか、前に向かつて歩き始めてしまった。「少し休憩しているのかもしれないし。」「私が関わるようなことでもないよ。」と、自分で勝手に理由を作って逃げようとしてしまった。ああ、私ってなんて情けないんだ…。そう思ったとき、前方からこちらに駆けてくる女性がいた。頭に美しい布を巻いた外国人の女性だった。その女性は私の横を通り抜けて、一直線におばあさんの所へと向かって行った。そしてこう言った。「大丈夫ですか？」と。とてもハッキリとした声だった。私の言えなかった言葉だった。その女性は、具合の悪そうなおばあさんに声をかけ、肩を貸してあげているようだった。私はその場から逃げるように立ち去った。

私はなんてちっぽけな人間だったのだろうと今でも思う。日本人は優しい、親切とよくいうけれど、あの時、勇気の無かった私より彼女の方がずっと、日本人だったと思う。当たり前のように人を助ける女性はとても格好良かった。まるで強くて勇敢な純白の翼をもつ天使のようだと、私は感じたのだ。

これが私の心のしこりだ。あの時、声をかけ、手をさしのべる機会があったのに、私はただ「見守って」いただけだった。もしもあの時、と何度考えた事だろう。でも過去は変える事が出来ない。だから私は、「ありがとう」と同じように当たり前前に「大丈夫ですか？」と親切に、手をさしのべられる人になり

たいと強く願うのだ。あの勇敢な翼をもつ天使のような人に、いつか。いつかなりたいと心から思い、日々を送っている。

